

日本劇作家大会2014 豊岡大会  
コウノトリ新人戯曲賞 候補作品

# 『ともこ初咲き』

作 赤澤ムック

プリーツスカートをはいた女が一人、まだ開店をしていないヌード劇場の客席に座っている。

五畳ほどの小さな劇場、客席は長椅子が四脚のみで、十五名も入れれば窮屈。昭和三〇年前後の城崎温泉、歓楽街。

女は客席に座って、誰もいない舞台を眺めている。

女 (鼻歌で島倉千代子「この世の花」を唄う)

女は客席から跳ねるように立ち上がり、舞台上り右手奥の楽屋へと消える。  
と、女は楽屋から劇場を覗く。

女 (軽い調子で) まだ誰も来ないもんね。来るわきゃないか昼のヌード劇場になん

か。・・・おつかしいよ。踊り子ちゃんは今もう昨日の晩に大阪を出ましたって話だったのにさ。ぴっかぴかで劇場のオープン飾ろって、朝からせっせと掃除して待ってんの。(舞台の床を指差し) 滑って転んじゃいそくにテッカテカ。・・・やーだ、待ちぼうげだ。踊り子ちゃん間に合わなかったらどうしよう。任されてんのに。おじちゃん怒るかなあ、怒るよなあ・・・

女、顔を引っ込める。

女 (楽屋から声だけで) 楽屋だって、私のアパートよりペッカペカ

と、暇を持て余した女は、楽屋と舞台とを仕切るカーテンの隙間から、そろそろと足を舞台上へ出す。

スカートをたくしあげ、ストリップパーの真似をして遊ぶ女。

女 (「この世の花」の鼻歌に合わせ、足を出したり引っ込めたりする)

と、劇場に一人の男がやって来る。

男は、舞台袖から伸びた大根足に面食らってしまい、声をかけられない。

もしもじと、黙ったまま客席に立っている。

男に気付かず、気分がのってきた女は、足首を回したり、足の指を開いたり閉じたりしている。

男はもしもじしながらも、その素足から目がそらせない。

女 (楽屋から声だけで) あっ、洗い桶も新しいの用意してこかな。踊り子ちゃん、三

週間かそこら居んだもん、自分専用のがあった方が嬉しいものね

女の足が楽屋へ引っ込む。ほっと息を吐く男。

女 (楽屋から声だけで) 下の処理もここですんのかな、じゃあ手鏡は床に置いとく方がいいのかしら、剃刀あてて……

等と、止まらぬ独り言を喋りながら、女は楽屋から出てくる

女 間違つてアソコ切ったら赤い花、……散るはいじらし初恋の花♪ (と、男に気付き) うわあ!

やあ

あんだどうしたのよ、こんな所で

久しぶり

今夜八時半から

なにが

オープン。ここの、ヌード劇場のオープンは今夜八時半から

そうなんだ

だから、早過ぎよ

そうかな

今、何時だと思ってるのさ

いいや、遅かったよ

ええ?

男 遅すぎた。ともこちゃんのおんな姿、見たくなかった。自分は踊らないって言うてたじゃないか。ここのおじさんに店任されて、女の子の手配と切り盛りするだけだつて

踊らないわよ

踊つてたじゃないか、今。足出してさ。今夜の練習だろう

アンタいつから覗いてたのさ。違うわよ、このいかれポンチ、変態!

これからそれでお金とろうつてのに、変態はないだろう

私は脱がないもの。受付でお金受け取って、笑顔でお見送りするだけだもの

それがどうした、変態相手にゃ変わりないだろ

お客さんは違う

じゃあ僕だつて違う

敬三君に見せるために、足、出してたわけじゃあないもの

金を払えつてことかい

女 どうしてそうなるのよ。来るはずの女の子が来ないから、ちょっと遊んでただけよ、気分がのっちゃったの、恥ずかしいこと言わせないで!

その踊り子が今夜八時半まで来ないかもしれない

男

女

男

女

男

女

男

女

男

女

男

女

男

女

男

女

男

女

男

女

男

女

男

女

男

女

女 そしたらオープンは明日から  
男 本当にお客さんに見せないの？  
女 うん

男はじつと女の顔を見る。女は気まずそうにそっぽを向く。  
男は大袈裟に頭をかいてみせ、

男 オー、ミステイク！・・・よかったあ

男は長く息を吐き、笑顔で背伸びをする。  
女は舞台の真ん中で、唇を突き出し揺れている。

女 幼馴染の女が、ヌードで働くなんて許せない？

きよとんとする男

女 近所の恥だから？

男 ともこちゃん、モギリするだけでしよう

女 そうだけど、腹立ってきちゃった。どうして私が脱ぐか脱がないか、敬三君に申し立てしなくちゃなんないんだろ。ねえ、なぜいけないの

男 仮定の話で喧嘩売るなんて、どうかしてるよ。不毛だな。脱ぐこと散々否定してたくせに

女 この先どうなるか分からないわ

男 自分は踊り子と違うって息巻いてたの、ともこちゃんだよ

女 なによその言い方、私が差別主義みたいじゃない

男は深くため息をつく

女 地元帰って、私んとこの両親に喋るんでしよう。御宅の娘さんは誰もいない昼間  
男 っから、一人で裸踊りしてましたよって

女 (呆れ) 今、君、裸じゃないだろう  
男 尾ひれつけて喋るんだ、きつと、どうせ！ 親の言うことも、アンタの言うことも聞かずに、地元飛び出した幼馴染のハスッパ女は、落ちぶれてなきや納得できないっちゃね。男なんちゃあやっぱりそがん生きモンたい

男は女を指さす。女は自分の口に手をあてる。

女 (そっと) 生まれ故郷は、どこにしよう

男 生まれた場所じゃいけないの

女 受付のおばちゃんに、ふる里たずねるお客もいないか

男 同郷のよしみってのもあるさ。本当のことを言えばいいじゃないか

女 その同郷が、お父さんの鉄工所の取引先かもしれない。……(話を変え)ねえ、

ここじゃ貧しい家に女の子が産まれると、立派なこの女将さんがその子、引き取って、色んな手習いしてくれたんだって。親の代わりに花嫁修業させてくれるの。売り飛ばすためじゃなくお嫁にいかせるためにだよ、信じられる？ そこののお湯と一緒に、全部晒せば、晒した分だけ受け入れてくれる。のぼせる程には熱くない、丁度良い温度なの。……私もここで生まれていたらなら、職業婦人でもなってたのかな。それでさ……

男は、続いていく女の語りに、懸命に割り込む。

男 今からだって遅くない。ぬるま湯は、なにも此処だけじゃないはずさ

女 敬三くん、それ褒め言葉だと思ってる？

男 (女に返事せず) 花嫁修業をせずに、花嫁になるってのは

女 (男の声も聞こえず) ここの人、羨んでする空想遊びも嬉しいの

男 (語気を強め) どうだろうか

女 ・・・やっぱりアンタ、私がここで働くの嫌なんだ

男 わざわざ海越えて働くところかい、ここは

女 わざわざ残る故郷かい。あそこは

男は、言葉にならない声を出す。

女 アタシの親がアンタに泣きついたなら、それは娘がいなくなつて寂しいからじゃない。稼ぎ手と、老後の世話をする人間がいなくて困ったからだ

男は、言い返せずに床を見つめる。

女 ここじゃ私の馬鹿な思いつきを憎む人がいない。空を見上げてほおつとしても叱られない、文字だけの本を読んでも取り上げられない。……庇ってくれた事あったよね、守ろうとしてくれて嬉しかったよ。でもやっぱりアンタはあそこ人間だからさ。あそこから生まれた人間だから

男 ともこちゃんだって……

女、小さく頷く

女 アソコから産まれたアタシ。……アソコ、出て行つたきり振り返りもされない

穴蔵

男 詩的な表現したって駄目さ。卑猥な話だろう、それ。せつかく人が真面目に聞いているのに

女 聞いてもらわず結構、オープンは今夜八時半から

女は舞台から飛び降り、男の横を通り過ぎて外へ出ようと

男は、女の腕をつかんで引き止める

男 ともこちゃんが働かなくなつて、君の代わりはいるよ

女 やりたいって思ってるのは、私

男 僕のお嫁さんは代わりがない

面食らう女、女を熱っぽく見つめる男

女 勘違いだったらごめんなさいね。敬三君、私たちそういう関係だったことあったかしら

男は女の質問には答えず、堰をきつたように喋り出す

男 君んちの隣に引っ越して初めて挨拶を交わした小学校四年の春から、運動会、遠足、中学校、高校の入学式、卒業式、夏休み、祭りで偶然出会った時、お正月、君の誕生日、僕の誕生日、いつだって言おうと思ってた。ああ、受験勉強してるんだな、今日は早くに寝たんだなと每晚眺め続けた君の部屋。言おう言おうと思つてはいながら二十歳を過ぎ、僕は就職し都会に出てしまった。やっと地元に戻れたと思つたら今度は君がいなくなつた

女 敬三くん、そんなにずっと  
男 そう、ずっと

男はつかんだ女の腕を離し、その両手を握ろうとする

女 大袈裟

女は、ひょいと男から離れる

女 嘘だわ、そんなの

男 君は僕の青春なんだ

女 お芝居の台詞みたい

男 偽りのない一途な思いさ。純情！

女 気色悪い  
男 ともこちゃん！  
女 (フザケて) はあい  
男 俺ん真っ直ぐな思いの侮辱すんなっち言いよろうも！

男が声を荒らげると、女は反射的に自らの頭部を両手で庇う  
しばしの沈黙

男 ごめん  
女 ずっと好きだったなんて嘘だ  
男 嘘じゃない。でも、もうこの話はよそつ  
女 恋人だっていたはずだ。そうだ、きつと地元戻るからってフラれたんだ、それで  
男 たまたま私を思い出した。初恋の幼馴染、綺麗な思い出に逃げ込んで自分守って  
女 想像力豊かなんだね  
男 私ら、もう三十越えてんだよ？

二人、しばしの沈黙

男 僕を攻撃して楽しい？  
女 私を道具にしないで  
男 してない  
女 穴埋めの道具にしないで  
男 (照れながら) 逆でしょ

男、女が白けていることに気付き

男 変わったね、ともこちゃん  
女 これからもっと変わるわ。今はまだ良い、オープン当日のこの劇場だっけいずれ  
男 廃れる。そしたら踊り子ちゃんだっけ集められない。その時にはきつと、劇場と  
女 同じく年を重ねたアタシが踊るんだ  
男 やっぱりその気  
女 五十を過ぎてても、ここから離れたくないアタシは、せめてこの町に恩返しをした  
男 くなる

男 そんな年寄りのヌード、誰が喜ぶもんか  
女 アンタこそ変わった、すっかりインスタントの即物男  
男 堅物男とは言われるけど  
女 なにが  
男 え

女 どこが

(恥ずかしがり) だからともちゃん

女 その時まで私を思ってくれたなら信じるわ、その一途。今まで二十何年も思い  
男 続けてくれたなら、この先だって平気でしょう。誰も喜ばない体になった私を迎  
女 えに来てみないさいよ……(まくしたてるよう、勢いよく) その頃の私は、パ  
男 ックの、読売旅行のサラリーマン相手に、慣れた芸を披露しているよ。花電車も  
女 お手の物。もっと年をとったら、自分の子供みたいな年齢の、通りすがりの卒業  
男 旅行生なんかに声かけてさ……「あっちの角だよ、ヌード見たいんだろっ?」……  
女 さも自分は、ただの親切な地元のおばちゃんよって顔して先回り、受付で待ち構  
男 え、照れながらやって来る彼らのお金を受け取るや否や、急いで今度は裏に回り、  
女 ゴムの伸びたスカート脱いで、ブラウス脱いで、どこも隠さないようなスケスケ  
男 を着てじゃじゃーん! 飛び出すの!

(皮肉っぽく) 若い子らは、きつと悲鳴をあげて驚くね

女 そうね、自分の母親みたいな年の私が、満面の笑みで登場してみせるんだもの。  
男 私、太りやすい体質だから、そりゃあ凄い体型になっているでしょうよ。ふふふ、  
女 期待と不安の入り交じった彼らの甘酸っぱさを、たるんだヌードが一気に凍りつ  
男 かせるの。でも、アタシはもうそんなの慣れっこ。詐欺タなんダと怒り出す人も  
女 いるかもしれない、けど、きつとみんな泣く泣く付き合ってくれる。「お袋みた  
男 いな年の女に恥かかせちゃいけない、入った自分が悪かった」……ってね。一  
女 曲目、遠い未来の流行歌に息をきらせて、ドスンドスンと私は踊る。二曲目、疲  
男 れちゃったアタシは裸んぼうのまんまでお喋りを始める。「どこから来たの?」  
女 目のやりどころに困る若い子に、そのものズバリ、観音様見せつけてさ

(呆れて) ほとんど嫌がらせじゃないか

女 それぐらいの非日常、あった方が楽しいじゃない。遊園地だってメリーゴーラン  
男 ドばかりじゃ退屈だわ

女 いつしか有名になるね、本来とは別の意味で

男 そーなれば本望たい、嬉しか

女 ほんに?

女 産まれた穴覗かせて、男に勇気うち希望ば与えんのよ

男は笑い出す。女もつられて笑い出す

男 ともこちゃん、歌、好きだったもんな。目に浮かんだ、おばあさん一歩手前の君  
女 が、にこにこ笑って歌い踊る姿。若い男に悲鳴あげさせながら、人気者になる姿

女、笑い終えて

女 敬三くん。ほんとはどうして私を訪ねてきたの



男、観念した様子で、姿勢を正す。

男 君のお母さんが死んじまった

女、無言で、勢いよく舞台へ上がる。

男 僕と一緒になら、少しは帰りやすくもならないかな。さっき伝えた言葉は本当。……  
経験無しは気色悪いかもしれないけど、僕は君を騙したりしない

男は女を追い、舞台へ上がろうとするが女に制される。

男 一緒に帰ろう

女 (詩でも口ずさむように) 穴から生まれ、穴使わずに閉じもせず……。みんな  
いんな遅いんだア、言つの気付くの迎えにくるの。だからアタシはこの一期一  
会、裸の付き合いに惹かれたんだア  
ともこちゃんのすいとおよ!

女 あちちちち……

女、笑ってレコードをかけ音楽を流す。  
かかる音楽は、島倉千代子「この世の花」

女 アタシはそっちにや入れんとたい。敬三くんと一緒に浸かってあげたいけど、き  
っと火傷しちゃうもの

男 ズル剥け上等じゃ!

女、ブラウスのボタンに手をかける

男は、強く目を瞑る

女、身体測定のように、生真面目に衣服を脱いで畳みをしていく

男 ふざけんな。ともこちゃんのヌード、俺が何十年想像してきてと思ってんだ

女 饑別をあげる

男 (両手を宙で、横に振って抵抗し) いらんたい

女 アタシ、アンタに忘れてほしくないって思えてきたんだ

男、次第にその目を開き、おずおずと女の姿を見つめる

産まれたまんまの女

女は、柔らかな表情で男を見つめ、男は、すすり泣きを始める

田舎育ちの中年女の裸体に、夕日が射し込む

男 思った以上のぺちやパイの寸胴だ。人の夢壊して、楽しいか、ともこー！

女 独りは怖い

男 地元戻ったら、ともこちゃんの破廉恥、尾ひれつけて言っつて、もう二度と帰れないことんしたる。迎えにも来なか。忘れもしなか

女 うん。敬三くん

男 なあに、ともこちゃん・・・

女 この劇場が廃れて、終わってしまう夜がきても、そこにいるお客さんが、今のア  
ンタみたいなの熱っぽい目で、この舞台を見つめてくれますように！

女は、満面の笑顔で御開帳

男 よっ、ともこー！

男は、女の名を叫びながら、大きく拍手を続ける。

夕日に照らされ、きらきらと輝く観音様に拍手を続ける。

幕

※作品の著作権は作者に帰属します。無断での上演・掲載・配布は固くお断り申し上げます